

早いもので、令和元年も年の瀬を迎えました。来年には、いよいよ東京オリンピック・パラリンピック競技大会（東京二〇二〇大会）が開催されます。東京二〇二〇大会のテーマの一つに「復興」があります。東京二〇二〇大会は「復興した東北の姿を世界に示す絶好の機会になる」と、大会組織委員会は述べています（アクション&レガシープラン二〇一六）。このアクション&レガシープランは、東京二〇二〇大会を東京・日本にとつてどのような意義のある大会にするかを考えるためのものだそうです。



日本で開催された、あるいは開催予定だった夏季大会を振り返ると、昭和十五（一九四〇）年の東京大会は、大正十二（一九二三）年の関東大震災からの復興を、昭和十九（一九六四）年の東京大会は、敗戦後の焼け野原からの復興を世界に示そうとするものだったと言われています。確かに、東京大会というのは復興と深く関係していると言えそうです。しかし、過去の二大会はいずれも復興が終了してから開催が決定されたものでした。東京二〇二〇大

会の開催決定は、東日本大震災発災の一年半後でした。ふつう、「復興五輪」は復興が終わってから開催するものです。それは気持ちの問題というより、復興の過程においては人・モノ・金を最大限、生活の再建に使うべきだからです。

規模の大きな国際スポーツ大会では、選手の好成績や大会の成功がしばしばナショナルリズムと関連づけられます。東京二〇二〇大会でも「日本すごい」が声高に叫ばれることと思います。しかし、それは一面的なものであり、ナショナルリズムを「国民

### 「オリンピックの遺産」

同士の仲間意識（助け合い）」という観点で考えた場合、東京二〇二〇大会の開催はどういった意味を持つのでしょうか。もし復興が終わっていないうちに、被災地から離れた場所で「復興五輪」を開催することを決めるような国があれば、その国が危機に際して団結することなどないのではないかと疑います。東京二〇二〇大会が盛況のうち閉幕することを願うと同時に、東京二〇二〇大会をきっかけに日本の分断が加速しないことを願います。（五）

※「幹事のつぶやき」は広島県理学療法士連盟の幹事が、政治に関する解説、時事批評、エッセイ、書評などを気ままにお届けするものです。是非、感想をお寄せください（hiroshima-info@pt-renmei.info）。なお、本コラムは個人の見解であり、広島県理学療法士連盟の見解ではありません。